

梶井基次郎『檸檬』を読んで（「何でも読もう会」余滴）

齊藤 征雄

梶井基次郎の『檸檬』は学生時代に読んだが、読み流しただけであまり覚えていない。そういう意味で今回読んだのは、初めてのようなものだった。

そもそも梶井基次郎については、若くして死んだ病弱な青白き青年という印象を勝手に作っていた。それが自らを「怪異」と称するほどのいかつい顔の持ち主だったこと、三高時代デカダンに近い荒れた生活を送ったことなどを初めて知ったのが正直なところである。

『檸檬』は「えたいの知れない不吉な塊」を抱えた青年が、「丸善」にレモンを爆弾に見立てて仕掛けるという、十ページにも満たない短編小説である。

この小説のミソは、「えたいの知れない不吉な塊」をどう理解するか、そして「丸善」に「レモン」という「爆弾」を仕掛けるという取り合わせに、何かしらの共感を覚えるかどうかにある。

一般に「不吉な塊」は、若者特有の不安や期待の入り混じったある種の憂鬱と解釈されるが、恐らくそれが正しい理解だろう。この小説が若者を中心にして読まれてきたことがそのことを物語っている。

しかし本当にこうした憂鬱は、若者だけのものだろうか。人間の人生にはいつまでたってもさまざまな苦悩が付きまとうわけで、それは歳を経たからといって決して小さくなるわけではない。つまり「えたいの知れない不吉な塊」を抱えるのは若者だけの問題ではないはずである

それが感じられないとすれば、「人間は、いかなることにとも馴れる動物である」と誰かが言ったように、若いときには感じ取られた憂鬱が、歳を経るにしたがって馴れがそれを感じさせなくしてしまうのである。馴れによってあらゆることに感受性が鈍るということ、果たしてそれは喜ぶべきことであろうか。

読後、『檸檬』の梶井のような若く研ぎ澄まされた感性を、いつまでも感じ取れる気持ちの若さを持ちたいものだと思った。

また小説の最後、丸善を爆破したいという気持ちをレモンの爆弾に託したのは梶井の感性のやさしさなのだろうと思う。